

京都府向日市 藪の傍  
放置竹林は  
みんなのプラットフォーム





「こっちに来るよー。気を付けてー」ノコで伐り込んだ竹が傾きかける。長さ20mにもなるうかという竹の根元を男性が抱え込み、倒す方向を慎重に見定めると、力をこめてダッシュで走り出す。密生した竹林のなかで無事に倒れると周りから歓声があがった。

京都府向日市に広がる放置竹林の整備をしながら、竹を活かした制作活動や竹文化の継承に取り組む「藪の傍」(代表・小関皆平さん)。取材に訪れた11月21日は、放置竹林の竹伐り体験と、伐採した竹を使った遊具づくりが行われた。

この日の活動には、京都建築専門学校佐野校長と学生、同志社大学政策学部の大和田教授と学生、一般公募により参加した親子、タケノコ農家、常連の参加者など40名以上の参加により賑わった。

午前中は竹伐り体験。京都建築専門学校の学生は慣れた様子で作業を進める。「竹は木材と勝手が違いますね。竹のしなやかさから切り口が閉まってくる感覚があります」と実践から学ぶことも多いそうだ。同校は「藪の傍」の立ち上げ当初から竹の冒険小屋や竹茶室の制作など、竹文化の継承に欠かせない活動を続けている。

同志社大学の学生は「SDGs時代のサステナブルな地域づくり」のフィールドスタディの一環として参加。初めての竹伐りに、ノコを力いっぱい使うがなかなか進まない。藪の傍のメンバーからのアドバイスもあり、徐々にコツをつかんでいく。

午後からは、八つ橋という複数の竹を組み合わせた形状の橋を渡して、子どもの遊び場作りに取り組む。今後はテ

ラスや滑り台も作る予定だ。佐野さんは「少しずつ遊び場を作って若い親子にも参加してもらえると良いですね」と今後を楽しみにする。

参加者の一人で、公園愛護協力で活動する晴佐久さんは「今日の活動で頂いた竹を使って、公園で遊ぶワークショップに使いたい。遊びの幅が広がります」と話す。他にも、草木染作家さんが竹染体験を行ったり、タケノコ畑を作ろうと竹林の整備の見学に来た方など、多彩な人々がそれぞれの目標を持って同じ時間を過ごしている。

小関さんに竹林を案内していただいた。整備された竹林は陽光が差し込みとても気持ちがいい。2018年から300坪の竹林を借り受けてはじめての活動は、現在では約2ヘクタールをフィールドに整備に取り組んでいる。「この辺りの竹林はもともとタケノコ畑でした。竹の子のために孟宗竹が植えてあり、5年以上の竹は切っていきます」とのこと。

「京都式軟化栽培法」といって、親竹の先を止め、敷き薬土入れを施すといった方法で、年間を通して丁寧に手入れを行っている。一方で、整備が届いていない竹林は、屋でも暗く枯れた竹が散乱し別世界のような。竹の早い成長に整備が追いつかないと放置竹林の解消にならない。できるだけ多くの人が関わるのが放置竹林問題の解決につながるポイントになるようだ。

竹は使い勝手がよく身近な暮らしに近い存在。昔は適度に伐採して薪や竹小物に使うなど自然と整備ができていた



という。でも最近是需要が少なくなり放置される畑が増えてきた。「藪の傍が竹林を活用して、楽しいイベントや制作活動を行っているうちに、自然ときれいになってきたんですよ」と小関さんは話す。

また、藪の傍メンバーの石田真由美さんは「竹の需要を作ることで、伝統文化と人の営みのある文化が守られる」と話す。こうした需要を作る「メンマ」の活用にも注目している。幼竹の段階で伐採して穂先の部分を使ってメンマを作れば、作業の負担も少ない。メンマの作り方を勉強して出荷すれば量もはけるので、効率よく放置竹林は増えなくて済む。高齢者でも取り組める保全活動だと期待を持っている。

藪の傍の理事メンバーには、かつて他県で竹林整備に関わっていたときから共に活動してきた、向日市の「竹の道径」の発案者で、竹製品の製造業を営む東洋竹工株式会社社長の太塚さんをはじめ、環境担当、減災防災担当、農業担当などそれぞれの道のプロに声をかけて参加してもらっている。

竹には様々な人を惹きつける魅力がある。竹林の環境に癒されたり、片づけをして達成感を得たりしてもいい。遊具で子どもが楽しんだり、研究テーマに生かしてもらってもいい。放置竹林がみんなのプラットフォームになっている。「楽しい気持ちがあればここに来たくなるでしょう」と小関さんは言う。一人一人の夢、やりたい活動をしていけば、竹林の景観は守られる。竹林に咲く藪椿のように、みんなの持つ夢を静かに見続けていきたい、藪の傍のメンバーはそんな思いを持っている。